
バカと発明家と召喚獣

Eduald

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと発明家と召喚獣

【Nコード】

N8974Y

【作者名】

Eduald

【あらすじ】

「バカテスのFクラスにもし発明家が転入してきたら」御女河^{おめがわ}
春榆^{はるにれ}という「科学者 兼 発明家 兼 引きこもり」で「女 兼 男」の人が転入してくる！より知能戦になった、試召戦争を堪能せよ！そして……一人も三途の川を越えずに済むのか……

オリジナルキャラクター紹介その1「御女河 春楡」(前書き)

オリジナルキャラクター紹介です。
よろしく願います。

感想もよろしく願います。

オリジナルキャラ紹介その1「御女河 春榆」

おめがわ
御女河 春榆
はるにれ

外見：小5ぐらいの女の子が白衣を着ている感じ。黒髪ロングの髪の毛なのは髪をずっと切らなかつた結果なので 前髪も長い。常にiPhoneを携帯しており、メモや情報工作一（ハッキング等）に使っている。目が悪いが、コンタクトレンズで間に合っている。

内見：実は 世界から注目されている科学者 兼 発明家だが、ほとんど部屋の外に出ない引きこもり。戸籍上は男。実際は秀吉。アニメオタクで エロゲーなどのプレイ経験もあるらしい。病弱で少し疲れるとバツバツバツ倒れる。

本人より：学校とか、めんどくさい。家で研究してた方が楽しい。

口癖：シヨボーン（´・`・´）（´・`・´）（´・`・´）（´・`・´）ノオワタなどネットによく使われる言葉。

第1問「バカと発明家と暑苦しい先生」(前書き)

1話です。初心者の文章なので、読みにくいとは思いますが、どうかよろしく願います。

第1問「バカと発明家と暑苦しい先生」

私は御女河 春榆。おめがわ はるこれ

この学園に今年入学（2年から）した。

爽やかな風が吹く春先、私は……

「この風は風速2mぐらいだな。この時桜の花びらの落下速度は……」

計算をしていた。

「その白衣の……えーと……御女河！遅刻だぞ。転入早々遅刻するんじゃない！」

何か平均体温の高そうな暑苦しい先生に呼ばれた。遅刻……？そんなわけはないはずだ。

「え？今 何時ですか？」

「登校時刻の5分過ぎだ」

「はあ？私は登校時刻のきっかり1時間30分前に家を出たのですが……シヨボーン（´・`・´）」

「お前のうちはそんなに遠いのか……？」

「ここから約138mですが？」

「お前は今まで何をしていたんだ……」

暑苦しい先生は封筒を取り出して言った。

「まあいい、これがお前のクラスだ。見ておけ」

「はい」

封筒のセロテープを剥がそうとしたがなかなか開かない。というか、久しぶりに手をマウスとキーボード以外のために動かしたのでうまく動かない。ああ、日光がうざりたい。開かないので暑苦しい先生に頼もうと思いき、暑い先生をみると他の生徒に封筒を渡しているところだった。

「吉井、遅刻だぞ」

「あ……鉄じ……いや西村先生」

「今 鉄人って呼んだだろ」

「ははっ、気のせいですよ」

「ん、そうか？」

「それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうか」

「えっと じゃあ、あのちっちゃい白衣の女の子は誰ですか？」

そう言っつて吉井っつていう人は私を指差した。小さいとは失礼な。

「ああ、転校生だ。お前と同じクラスだから 仲良くしろよ っつて

ちがう。おまえはなぜ先に遅刻の謝罪をしないんだ。本当に罰をあ

たえている意味がないな」

「先生。僕、遅刻はあんまりしてないですよ？遅刻の常習犯みたい

に言わないでください」

暑い先生はため息をは「っつとき 封筒を取り出した。

「遅刻は、な。ほら、受け取れ」

宛名の欄には『吉井明久』と書いてあった。

「ありがとうございます」

びりびりびりびりびり

封筒をやぶき、紙を広げると

「F」

吉井君の紙には大きくそう書いてあった。

「ねえ」

私はいきなり 吉井君に声をかけられた。

「封筒開けてあげよっか」

こいつ 嫌がらせだろうか。さつき暑い先生がこいつと私は同じクラスって言っていたのを知ってやっているんだろっ。

「私は別にいいです」

「え？なんで？」

心底分らないというような顔をしていた。こいつ分かってなかったみたいだ。バカだな。

「じゃあ、開けていいですよ」

びりびりびりびりびり

「F」

もちろん、そう書いてあった。

「あ」

やっと気づいたか……

「僕と同じクラスだね。1年間よろしく」

気づいてない……こいつ 想像を絶するバカだ。

こうして、吉井君と一緒にクラスへ向かうことになった。

く Aクラス前く

「うわああ」

吉井君が Aクラスを窓に張り付くように見ている。Aクラスの壁は全面窓になっている。

「ここがAクラスか！ 噂通りのすごい教室だなあー！」

この学校はAくFクラスがあって、年の最初のテストで学力によって振り分けられるらしい。まあ、原油を重油やガソリンなどに分けるのと同じ原理だ。

それにしても、すごい教室だ。

エロゲで出てくる教室は 机ぐらいしかないのに、この教室にはエアコンからリクライニングシート、パソコンまで……

「パソコン!？」

「どうしたの いきなり？」

「パソコン……あ Windowsかくなあんだ」

パソコンはMacに限りのだ！ 賢い人は全員 Macを使っているのだぞ！

「無視しないでよ」

「あ、ごめんなさい。この学校はパソコン持ち込み禁止と聞いていました、持ってきていいんですか？」

「Aクラス以外は駄目だよ」

「チツ」

「パソコン…好きなの？」

「まあ」

どうやら、Aクラスのホームルームというのが始まったようだ。黒髪の女の子が前にでて話し始めた。美人だが、神々しさを放っていて近づけなさそうな、そんな女の子だった。3次元の女の子も捨てたもんじゃない「おい、おまえら。まだクラスに入っていないのか！さっさと行け！ホームルームが始まってしまっぞ！」な。

「はーい すみませーん」

〈Fクラス前〉

「鉄人は足が早いな…ゼエゼエ」

「あの 降ろしてもらえますか？」

私は 今吉井君にお姫様抱っこをされている状態なのだ。

なぜこうなったかと言うと…吉井君が暑い人に注意されてもAクラスを見続けていたので「補習だー！」と暑い人が追いかけて来て、なぜか吉井君が「やばい！」というような顔をして お姫様抱っこしてここまで走ってきたのだ。

「あの この体勢は骨盤に負担がかかるので、なるべく早く降ろしていただきたいのですが」

「ん、ああ」

「さて、入りましょうか」

「うん……」

吉井君は少し悩んでいるような顔をしていた。

実は私も、学校が初めてなのでとても緊張している。クラスで嫌わ

れないかとか、パソコン無しで生きていけるのかとか、某アニメのように友達ができない…みたいなことになったりしないか、なぜかけいおん部に所属してしまうとか……そういうのはいやだ!…いや、いいかな?

と 考えているうちに吉井君は決心してドアを開けようとしていた。「すみません 遅れちゃい」「はよ座れ 蛆虫野郎!」「まし…ってひどくない!?!」

私は本当に これからが心配になった。

私も仕方なくクラスに入ると、

「……女の子だ!……!」「……」

皆の視線が一斉にこちらへ向いた。貪欲な目で私を見ている。

「私は戸籍上、男です!」

「あははは!面白い子だなあ」「……(カシャカシャ)」「おお!同志じゃ!」「ロリ萌え」「だまれ ロリコン」「ウチも 女の子なのに……」

信じてない……

はあー。でも、そこまで恐い人はいなさそうだ。少しほっとした。

その時、私はいきなりクラッと……

バタッ

「えっ 倒れたぞ!」「人工呼吸だ!ハアハア」「だまれ」「……」

(ダバダバ)「」

意識が遠のいて行った。

第1問「バカと発明家と暑苦しい先生」(後書き)

御女河 春榆さんは、病弱なので そこんところよろしく。

次は……夢にするか…保健室にするか…迷ってます。

感想もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8974y/>

バカと発明家と召喚獣

2011年11月27日01時59分発行